

# 近代日本美術史と近代中国

2014年11月22日(土) 14時～17時10分

於：中国社会科学院文学研究所 社科講堂第一會議室

主催：中国社会科学院文学研究所、渥美国際交流財団関口グローバル研究会 (SGRA)

協力：中国社会科学院日本研究所、清華東亜文化講座

助成：国際交流基金北京日本文化センター、鹿島美術財団

## 【フォーラムの趣旨】

「美術」とその一部とみなされる「工芸」は、用語の誕生から「制度」としての「美術」「工芸」の成立まで日本の「近代」と深い関係にあり、そして近代中国にも深い影響を与えた。「美術」と「工芸」は、漢字圏文化と西洋文化との関係・葛藤を表していると同時に、日中両国のナショナリズム、国民国家の展開・葛藤とも深い関係にある。一方、「美術」と「工芸」の展開の仕方や意味づけにおける日中の違いも無視できない。この違いはほかならず日中の「近代」の違いでもある。

本フォーラムは、美術史学と文学史・文化史の視点から日中両国の「近代」に焦点を当て、日本からの研究者の講演を中心に、中国の研究者の討論も交え、1日目は中国社会科学院文学研究所、2日目は清華大学で開催し、従来活発であったとはいえない日中近代美術・文化史研究交流のさきがけとなることを目指します。日中同時通訳付き。

## プログラム (第1日目)

14時00分—14時10分	司会：趙京華（中国社会科学院文学研究所研究員） 開会、挨拶：陸建徳（中国社会科学院文学研究所所長） 今西淳子（渥美国際交流財団常務理事）
14時10分—14時50分 【講演1】	近代の超克—東アジア美術史は可能か 佐藤道信（東京芸術大学教授） よく見馴れた風景として、欧米の国立レベルの大規模な美術館では、時代順に展示された「美術史」の内容は、中世ならドイツやフランス、ルネサンスはイタリア、17世紀はオランダ、18～19世紀はフランスやイギリス美術を中心としながら、実質「ヨーロッパ美術史」を展示しています。もちろんその中で自国美術史の比重は増えますが、基本的にどの国でも「ヨーロッパ美術史」が共有され、自国美術史はその一部という構成になっています。 一方、東アジアでは、中国・台湾、韓国、日本、いずれの美術館でも、基本的に自国（一国）美術史を展示しています。広域美術史を共有するヨーロッパと、一国美術史を中心とする東アジア。東アジアにおける「美術史」が、実際の歴史的な美術の交流と実態を反映しない、各国ごとの一国美術史として成立した背景には、19世紀の華夷秩序の崩壊と以降の東アジア世界の分裂、その中で各国がそれぞれバラバラに、自国の美術史を構築してきた経緯があります。したがって、実態を反映した「東アジア美術史」の構築は、東アジアが近代を超克できるかどうかの、一つの重要な試金石となることが予想されます。現時点での課題と展望について考えてみたいと思います。

14時50分—15時05分 【指定討論1】	董炳月（中国社会科学院文学研究所研究員）
15時05分—15時20分	（質疑応答）
15時20分—15時50分	（休憩）
15時50分—16時30分 【講演2】	<p>工芸家が夢みたアジア：〈東洋〉と〈日本〉のはざままで</p> <p>木田拓也（東京国立近代美術館工芸館主任研究員）</p> <p>20世紀前半、多くの日本の工芸家が工芸の新たな源泉を求め、海を越えて中国大陸へと渡った。古来、日本の工芸家にとって、アジアは工芸の源流として憧れの地だったが、いち早く近代化を成し遂げた20世紀前半の日本人のまなざしにおいては、アジアは近代化が進む日本では次第に失われつつあった前近代的な生活風俗の記憶をとどめる郷愁の地でもあった。20世紀初頭には、中国大陸各地で墳墓や遺跡の発掘が行われ、出土した遺物が流通するようになる。そして、欧米や日本で、中国の古陶磁や青銅器のコレクション形成が行われるようになる。こうした動きに対応するように、1920 - 30年代の日本では、広く東アジアの源泉に根差した、新古典的な作品を制作する工芸家があらわれる。アジアにおいては、陶磁器や青銅器や漆器などを賞玩してきた歴史があり、工芸にはアジアの人々が共感しうる近代化以前の生活文化に根差した価値観が含まれているといえそうだが、新古典的な工芸作品からは、西欧近代をモデルとする欧化主義にあらがい、東洋の工芸文化の正統的な担い手としての役割を担おうとしたかつての工芸家の姿が浮かび上がってくる。</p>
16時30分—16時45分 【指定討論2】	李兆忠（中国社会科学院文学研究所研究員）
16時45分—17時00分	（質疑応答）
17時00分—17時10分	閉会、挨拶：趙京華（中国社会科学院文学研究所研究員）

## 講師略歴

### ■ 佐藤道信 ☆ さとうどうしん ☆ SATO Doshin ☆

1956年生まれ。1981年東北大学文学研究科修士課程修了後、板橋区立美術館、1982年東京国立文化財研究所、1994年東京芸術大学に勤務、現在同教授。この間、1985～86年文化庁在外研究員（在米近代日本美術調査）、2000年ハイデルベルク大学非常勤講師。近代日本美術史が専門。近代日本画の研究から始め、欧米・日本での「日本美術史」観の違いの検証から、近代日本の「美術」の概念用語、美術行政、機構制度、欧米・東アジアでの「美術史」の構造分析などを行なう。著書：『「日本美術」誕生』（講談社メチエ、1996）、『明治国家と近代美術』（吉川弘文館、1999、サントリー学芸賞・倫雅美術奨励賞）、『美術のアイデンティティー』（吉川弘文館、2007）“Modern Japanese Art and the Meiji State, the Politics of Beauty”（Getty Publications, 2011）、共著『美術の日本近現代史 制度・言説・造型』（東京美術、2014）など。

### ■ 木田拓也 ☆ きだたくや ☆ KIDA Takuya ☆

1970年生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。佐倉市立美術館を経て、1997年より東京国立近代美術館工芸

館勤務。現在、主任研究員。博士（文学）。

主な展覧会に、『加藤土師萌』展（1999）、『昭和の桃山復興』展（2002）、『日本のアール・ヌーヴォー1900 - 1923』展（2005）、『越境する日本人 工芸家が夢みたアジア 1910s-1945』展（2012）、『東京オリンピック 1964 デザインプロジェクト』展（2013）など。著書に、『近代日本デザイン史』（共著、美学出版、2006）、『美術史の余白に 工芸・アール・ヌーヴォー・現代美術』（共著、美学出版、2008）、『工芸とナショナリズムの近代—「日本的なもの」の創出』（単著、吉川弘文館、2014）など。近年の主な論文に、「『伝統工芸』と倣作：草創期の日本伝統工芸展の模索」（『東京国立近代美術館研究紀要』第15号、2011年）、「昭和の桃山復興：陶芸の近代、伝統の創出」（早稲田大学学位論文、2012年）、「Japanese Crafts and Cultural Exchange with the USA in the 1950s: Soft Power and John D. Rockefeller III during the Cold War」（*Journal of Design History*, Vol. 25, No. 4, 2012）、「大河内正敏と奥田誠一 陶磁器研究会／彩壺会／東洋陶磁研究所——大正期を中心に——」（『東洋陶磁』第42号、2013年）など。

## SGRAとは

SGRAは、世界各国から渡日し長い留学生活を経て日本の大学院から博士号を取得した知日派外国人研究者が中心となって、個人や組織がグローバル化にたちむかうための方針や戦略をたてる時に役立つような研究、問題解決の提言を行い、その成果をフォーラム、レポート、ホームページ等の方法で、広く社会に発信しています。研究テーマごとに、多分野多国籍の研究者が研究チームを編成し、広汎な知恵とネットワークを結集して、多面的なデータから分析・考察して研究を行います。SGRAは、ある一定の専門家ではなく、広く社会全般を対象に、幅広い研究領域を包括した国際的かつ学際的な活動を狙いとしています。良き地球市民の実現に貢献することがSGRAの基本的な目標です。詳細はホームページ（[www.aisf.or.jp/sgra/](http://www.aisf.or.jp/sgra/)）をご覧ください。

## SGRAかわらばん無料購読のお誘い

SGRAフォーラム等のお知らせと、世界各地からのSGRA会員のエッセイを、毎週水曜日に電子メールで配信しています。SGRAかわらばんは、どなたにも無料で購読いただけます。購読ご希望の方は、ホームページから自動登録していただけます。